

2000年、ディケンズ・ユニバース報告 (My Third Experience in Dickens Universe)

2000年7月31日より8月4日まで、カリフォルニア大学サンタ・クルース校の陽光のもと、ディケンズ・ユニバースが例年の通り開催されました。今回は20回目の記念の年で、私個人には3度目のユニバースです。朝の8時に始まるディスカッションから、夜11時過ぎまで行われるビデオ上映まで、あまりに充実したプログラムに、ワークショップや講演の途中で何度も頭の中が飽和するのを感じては、英語力不足等々を痛感して落ち込むことも多いのですが、性懲りも無く今回も出掛けてきました。なお、日本からの参加者に、市川市の中学の英語の先生もいらっしゃいました。中学生の生活指導にお忙しい中、時間を見つけてはディケンズを読み、毎年のように参加していらっしゃいます。

2000年の課題は Our Mutual Friend でした。ユニバースを主催するディケンズ・プロジェクトの会報でも触れていましたが、参加者の関心を特に集めたのは、登場人物のアイデンティティの問題、小説と現実のロンドンにおけるテムズ河の役割、小説からうかがわれる当時の、またはディケンズ自身の結婚観や、金銭、廃物 (waste) の問題などでした。テムズ河について、レスター大学のフィリップ・コーリンズ先生は “Dickens's London and its River” と題した講演の中で、ヴィクトリア朝ロンドンの貧民たちの惨状について言及しながら、テムズ河の描写を通じてディケンズがいかに不公平な社会構造を描き出していったかを興味深く述べられました。

結婚に関連して、ライス大学のヘレナ・ミチエ先生は “Honeymoon Gothic: Carnal and Other Knowledges” という講演の中で、ヴィクトリア時代の57組の新婚夫婦を調査した結果報告をなさいました。ミチエ先生によれば、当時の夫婦にとって新婚旅行は何らかの秘密が暴露される場であったとか……。正直に言えば、今回のミチエ先生の講演は私にはあまり興味をそそるものではなかったのですが、これは私の理解力不足によるところが大きいようです。講演は要所所で聴衆の笑いや感嘆の声を誘うウィットに富んだもので、「ヘレナの講演が一番面白かった！」ともっぱらの評判でしたから。

冒頭で言及したワークショップは、アメリカの各大学から集まってきた大学院生の先導で行われます。ユニバースが始まる前に、指導者としての院生のガイダンスに確か3日ほどが費やされています。私が所属したグループのリーダーの一人は、ミチエ先生の教え子でした。いつもエネルギーで知的なミチエ先生の授業は刺激的で、今回は大きなお腹を抱えてユニバースに参加した先生を女性としても尊敬している……とは、その大学院生の弁です。なお、ユニバースで、希望者はリーダーの院生の指導のもとでエッセイを書き、ユニバース主宰のジョン・ジョーダン先生のチェックを経て、単位を修得することもできるようです。

「スター」として紹介され、一段と大きな拍手で迎えられた講演者が、ケンブリッジ大学のジリアン・ピア先生でした。来日経験も、日本人研究者を指導した経験もおありの先生に、優しくお声をかけていただいたことが、大変嬉しく思い出されます。先生の講演は、

“Arctic Waste: Franklin and Traumatic Excess” と題され、ヴィクトリア朝で流行した北極探検の背景を探るもので、“The Frozen Deep” がサー・ジョン・フランクリンの 1848 年の探検に基づくものであることにも着目なさっていました。なお、1 週間のユニバースに続く週末、よりアカデミックな研究集会が行われます。今年の集会のテーマは、ピア先生も触れられた “Victorian Waste” でした。

夜のビデオ上演は、BBC が 1998 年に制作した Our Mutual Friend でしたが、プロデューサーのキャサリン・ウェアリング氏自身が毎晩案内役を務め、“From Page to Screen: How the Dickens Do You Film Our Mutual Friend?” という講演も行う力の入ったものでした。ビデオの評判は上々でしたが、唯一の不満と私や他の参加者が話していたのは、ジェニー・レンが年よりじみていたことと、髪の毛が金髪ではなく黒かったことです。

講演やワークショップに明け暮れる中、ほっと一息つかせてくれるのが、“the Friends of the Dickens Project” の方々が準備してくださる午後のお茶です。時には、ヴィクトリア朝の装束でお茶を入れてくださることもあります。ミルク・ティーやクッキーも美味しいのですが、夜肌寒いわりに、昼間の日差しの強いサンタ・クルースで、フルーティーなアイスティーは何にもまして美味しく感じられます。他にも、ブックフェアやオークション、場合によっては寸劇など、「ほっと一息」も盛りだくさんのユニバースで、今回楽しかったのが、朗読会でした。講演者の先生方や一般の参加者、ワークショップ・リーダーの大学院生、ユニバースを影で支えてくださるスタッフの方々が、Our Mutual Friend の登場人物になりきっての朗読会でした。中でも名優の誉高かったのが、サイラス・ウェッグ役のフィリップ・コーリンズ先生でした。先生の名演技に聴衆はお腹を抱えて笑い転げたのです。

2000 年も楽しくまた慌しく過ぎたユニバース・ウィークでしたが、今回個人的に残念だったのは、ユニバース初日まで渡米できなかったため、1 週間を通して時差ぼけに悩まされたことです。ほぼ同時期の空の旅を経てイギリスからいらっしゃったピア先生は着いたその日からお元気そうでしたが、1 週間を十分に楽しむために、やはり数日前にはサンタ・クルースに到着する方が良さそうです。普通に申し込みをする場合、宿舎に入れるのはユニバース初日からですが、大学院生向けのガイダンスも行われているわけですし、お願いすれば数日前から宿舎に入れるのだそうです。なお、2001 年のユニバースはジョン・ジョーダン先生お気に入りの Bleak House についてです。私は残念ながら参加できませんが、サンタ・クルースを覆う朝霧が、ユニバース参加者には、ロンドンを覆う霧に見えてしまうことでしょう。